

てる時は色を出すなり、又夕方よりむろの内へ入置べし。

窖の事

あなぐらは南向に入口を明、障子をかけ置なり、深さは五尺より一丈ばかり深く掘下を平にし、又四方へ棚を拵へ植木を入れ置べし、然ども窖は濕氣多きゆへ、扶桑花、山丹花、使君子、霸王樹の類の陽氣を好て、甚寒にいたむ物は入べからず、必腐枯るものなり、さして寒をも恐ずして、陰氣を好類を入れし、又はきかけむろと云あり、是はまづから掘を長くほり、左右へ植木を置、段を作中を通行するなり、其上へ橋の様に木を渡し、簾をあみてかけ、上へ土をかける也、土は厚程よし、兩方口にして明りをとり、夜はむしろにて覆べし、是に入る物は萬年青、石菖など又冬木類、葉物を入れよし。

土藏の事

塗垂ぬりだれも同東西へ長く建て、皆壁にして、入口も窓も皆南向に明、晝は障子をかけ、夜は戸を立る也、是に入る草木は、格別寒をも恐ざる百兩金珠砂根蘭の類、其外斑入物、冬木類を入れし、又高き土地にては、藏の椽の下を掘窖にして、又植木を入れし、上の家根は茅葺又は瓦にてもよし。

〔通賢花壇抄〕唐むろ出入の時節

立冬十月節に入、清明三月節に出すを定とす、但し年の時候によりて遅早あるべし、其草木のうち寒氣を恐るゝものは、早く入て遅く出するなり、

をかむろ出入の時節

これも十月節に入、三月中に出す、但し唐むろとは入るものことなり、

あなぐらむろ

出入をかむろど時節おなじことなり、